統計人物史
（明治編）

杉亨二（すぎこうじ）

（文政11年～大正６年）

国勢調査のような人口センサスの手法に初めて着目したのが杉亨二であった。

この人，慶応元年に杉亨二と改名したが，その前は杉純道といって長崎の生まれである。幼年にして父母を喪い，祖父の杉敬輔に育てられた。

幕府の時計師，上野俊之丞の弟子となっているうちに，たまたま上野宅に寓居していた緒方洪庵，手塚律蔵，村田徹斉らから夜間学問を学んだ。

のち大村の村田徹斉の家にやっかいになっていたが，大阪にある緒方洪庵の医学塾に学ぶことになった。しかし半ばにして病気のため長崎に帰った。

村田徹斉が江戸勤番となるに従い江戸に出て，杉田成卿に蘭学を学んだ。奥平候の蘭学教授をしていたこともあったが，野に下り，やがて勝隣太郎の家で蘭学を教えることとなった。

その後，老中でもあり福山十万石の藩主でもあった阿部伊勢守正弘の藩邸に移り，そこで洋学を学んだ。

阿部伊勢守没後は，万延元年に蕃書取調所教授手傳となった(元治元年に教授となる)。蕃書取調所は，幕府が南蛮渡来の学問を研究するために九段下に設立したもので，のちの開成所，さらには東京帝国大学の前身である大学南校となったところである。ここで杉亨二はヨーロッパのセンサスの手法を知ったのである。それは蕃書取調所の教授である西周と津田真道が，ヨーロッパから帰国して伝えたものであった。杉亨二はそれ以後，ヨーロッパ流の人口センサスの実施を夢みたのである。

おりしも明治維新のために徳川幕府が崩壊すると，杉亨二は駿河の国に移った。ここで杉亨二は，駿府奉行中臺伸太郎に面談した際に政表調査の必要を説いた。これに賛同した中臺らの進めによって，明治２年に駿河の国人別調べという人口調査を実施した。この調査でたまたま清水を訪れた時，清水次郎長こと山本長五郎と出会い，調査に協力してもらうことになったのだが，その次郎長を評してこういっている。

「久能山から一里ほどの宇土山の開墾と，製塩のこと，駿河への移住人の産業のことなどを話した。純朴な良い男である。」（杉亨二自叙伝）

この調査は，藩の重役に異議を唱えるものが出たため中止となり，杉亨二は沼津兵学校でフランス語の教官を勤めることになった。

明治３年に民部省に出仕したが，戸口調査の実施に関連して，統計調査とは異なるからと意見が対立し，退官した。翌４年12月に正院大主記となり，諸官庁に政表を報告させ，これを編纂して明治５年「辛未政表」を作成した。以後毎年刊行しながら，大蔵省発行の「輸出入貿易年報」の改良を上申して採用された。

明治７年３月８日には太政官の政表課長に転任した。寺田勇吉，呉文聡，山川為次郎，宮川盛二郎，岡松徑らのスタッフの協力のもとに，各郡の租税，府県税，町村税等を調査して，明治６年以後の分を印刷していたが，政表課は明治８年９月廃止された。

明治12年４月，部下９名と共に山梨県に出張した杉亨二は，2,000名の調査員を任命し，有名な「甲斐国現在人別調」を行った。

明治14年に統計院が設置され，大隈重信が長官になると，杉亨二は大書記官に任命された。明治15年には「第一統計年鑑」を刊行するなど活動を続け，明治18年に退官した。

九段に共立統計学校を創立したり，スタチスチック社（のちに統計学社）を創設して「スタチスチック雑誌」を発行するなど統計学の研究普及を図っていたが，明治43年には国勢調査準備委員会の委員となった。

大正９年には，第一回国勢調査が実施された。しかし，杉亨二はその３年前の大正６年12月４日に亡くなっていたのである。

晩年には両眼とも失明した杉亨二は，簡素を旨とし，衣服は家族全員が木綿を用いていたという。口癖のように言っていたのは，「衣服は三越に預けてあるものと心得よ。」であったそうである。

（伊藤）

迷解 植物辞典（最終回）

【ら ～ ん】

らっきょう（辣韮）……〔原義〕ゆり科の多年草。秋，紫色の細かな花を開く。卵状の地下茎は食用。

〔派生〕 猿にこれを与えると，皮をむいていって最後には何もなくなってしまう。猿は大変に怒るそうである。

洗い熊にビスケットを与えると，洗っているうちに溶けてなくなってしまう。洗い熊も大変に怒るそうである。

亭主に多めにお金を持たせると，はしご酒をするうちに全部使ってしまう。妻は大変に，大変に激怒するそうである。

りょくとう（緑豆）……〔原義〕まめ科の一年草。別名「文豆（ぶんどう）」ともいい，インド原産。草丈は約50cm。品種によりつる性のものもある。葉はアズキに似て夏に黄紫色の蝶形の花をつけ，長さ約10cmのさやに10～15粒の種子ができる。インド，中国を初め多くの国で栽培されている。

〔派生〕 種子はスープ，煮豆にしたり，中国では豆そうめんにしたりして食べている。日本での主な用途は，暗所で発芽させて「もやし」を作っている。原料はインドやビルマからの輸入もの。

最近の子供は「もやしっ子」といわれているが，生まれたての子供はさしずめ「緑豆（りょくとう）っ子」というわけである。

ルバーブ（garden-rhubarb, wine-plant）……〔原義〕**た**で科の宿根草。食用大黄（だいおう），丸葉大黄ともいう。シベリア南部原産。春に芽生え，初夏に茎立ちして1～2mになる。長く太い鮮紅色の葉柄と，長径40cmほどの丸いハート形の葉をもつ。

〔派生〕 葉柄には酸味と香りがあり，皮をむいて煮て，パイ，プリン，ケーキの原料となる。またゼリー，ジャムにもする。欧米では家庭菜園などに植えられている。日本には明治時代に伝えられたが，その後あまり普及していない。これが本当の「**た**で食う虫も好き好き」である。

れんげ（蓮華）……〔原義〕まめ科の2年草。中国原産で，古くから日本に渡来し，緑肥として栽培されてきた。「蓮華草（れんげそう）」ともよび，植物分類学上は「紫雲英（げんげ）」という。花の形が蓮の花に似ているので，この名がつけられたという。

〔派生〕 「やはり野におけ蓮華草（れんげそう）」という名セリフが一昔前にいわれた。蓮華草のような野草は，花器にさしたりしないで野においてこそ美しさが発揮されるのだという意味から転じて，ある地位以上の器ではない人物を評する時に使うのである。われわれの大半はこれにあたるはずだが，当の本人はなかなかそれに気づかないという共通点がある。

ろうばい（蠟梅）……〔原義〕ろうばい科の落葉かん木。中国原産。2月ごろ外側が黄色，内側が黒紫色で香気の高い花を開く。早春の観賞樹木。生け花にもよく使われる。

〔派生〕 「ろうばい」というと老梅を思い浮べるが，これは年を経た梅の木のこと。老輩とは年とった人たちのこと。老廃は年とって役にたたないこと。いずれにしても明日の我が身を象徴している。

昔から不老不死は人間の果てない願望のひとつで，冷凍睡眠とか，いろいろとＳＦ的なアイデアがある。しかしそれが現実化されて，自分より若い親に合うなんてなんともゾッとしない話である。

わすれなぐさ（勿忘草）……〔原義〕むらさき科の多年草。ヨーロッパ原産で，花壇，鉢植え用。園芸上は一年草として扱われている。5～6月，茎の先端に瑠璃色の花を開く。本来のわすれなぐさは，高さ約30cmとなるが，最近では10～15cmの矮性種が中心。

〔派生〕 英名はforget-me-not。わすれなぐさとはその和訳名である。花ことばは「私を忘れないで。」毎年6月，転勤の時期になるとこの花を買う人が増えるとか。

んめ（梅）……〔原義〕「うめ」のなまったもの。いばら科の落葉かん木。中国原産。早春に白色，紅色等の花を開く。実は食用，薬用。

〔派生〕 うめは茨城の県木である。梅林といえば水戸の偕楽園が有名だが，その他に奈良県「月ヶ瀬梅林」，和歌山県「南部（みなべ）梅林」，静岡県「熱海梅林」，埼玉県の「梅園（うめぞの）梅林」，神奈川県「大倉山梅林」が有名である。

うめを見に行くのならばシーズンをはずした方が，人を見に行くのならシーズン中が最高である。

今回をもって「迷解植物辞典」は終ります。　（伊藤）